

140 years on

Nature 創刊140年を迎えて

Nature Vol. 462(12)/5 November 2009

創刊記念日にあたり、過去を振り返り現在を認識するとともに、それを足場として、未来に目を向けていきたい。

Natureの創刊号は1869年11月4日に発行された。2009年11月5日号は7269号に当たる。Natureは、幾度かの戦争を生き抜いてきた（その間に発行中止になったことが少なくとも一度はあった）。今のところ、伝統的な出版モデルに対するインターネットの猛攻撃にも耐えていることを考えれば、少しは満足感に浸っても許されるかもしれない。Natureに掲載される論文は被引用回数が多いが、それには十分な理由があると思われる。Natureを読みたい人々は大勢いて、電子版の読者数は毎月数百万人に及ぶ。このような状況の中で、我々は、どこをどう自己批判すべきなのだろうか。もちろん読者は、多くの指摘を用意していると思うが、我々の側から、そのいくつかを示してみたい。

その1つは、Natureが人々にどのように利用され、悪用されているのかを監視し、場合によっては、それに対抗する必要があるという点だ。

Natureの歴史、とりわけ過去数十年間の歴史において、ジャーナルとしてのNatureの目標は、自然科学およびそれを越えた分野に対して、多大な影響を広範囲に与える論文を出版することだった。この目標を達成するため、強固な独立精神をもって、多くの努力がなされてきた。Natureの編集者は、学会や編集委員会との結びつきがなく、何らの商業的要請とも無関係であるため、記事や論文の掲載に関する最終決定は、常に我々独自に進めてきた。投稿論文について3人の査読者全員が否定的な評価を下した場合でも、この3人が考えるより興味深い論文だと確信し、その評価を覆したこともあった。こうした判断の正当性は、コミュニティの反応や被引用回数によって一般に確認されてきたようにみえる。

しかし、我々の判断が、妥当な範囲を逸脱して重視されるケースもある。Natureに掲載された論文の影響で、多額の補助金、慈善寄付金、特席教授の地位が与えられているが、この場合、独自になされるべき判断に代わって、Natureの編集者の判断が事実上利用されている。これは、意思決定者の責任放棄であり、避けるべき落とし穴である。

これに関連して、研究者が「トップクラスのジャーナル」

に論文を掲載しなければならないという重圧に直面している事実があり、これは我々にとって苦しみ種だ。むしろ我々は、未熟で粗雑なインパクトファクターを超えて、論文の引用やその他の効果・影響に対して、より透明性を確保すべきだと考える。また科学者の他の仕事のインパクト、すなわち、データベースへの寄与や長くつらい査読作業などをきちんと記録する、新しいシステムの創設を支持したい。我々としては、表面に現れにくいこうした重要な功績を把握できる独自のシステムを開発し、同じ目標をもつ人々と一緒になって前進していきたいと考えている。

Natureは、学術ジャーナルとしての役割と同時に、補完的にサイエンスマガジンとしての役割も担っている。本誌は、近年、ジャーナリズムコンテンツを強化し、外部の執筆者によるOpinion記事の掲載を始めたが、今後の展開に期待してほしいと思う。その一例がコラムニストの導入だ。11月5日号では、2007年1月以来、科学と政策の交わるコラム記事を執筆し続けてきたDavid Goldstonによる「Party of One」の最終回を掲載した。このコラムはデビュー以来、米国の政策立案者の必読コラムとなり、「The scientist delusion」と題された宗教に関する記事（Nature 2008年1月3日号17ページ）は、2009年の米国サイエンスライター協会賞の名誉表彰作品となった。Goldstonのコラムの成功を踏まえて、Natureでは、月1回連載のコラムニスト2人が新たに誕生する。

最も本質的なこととして、Natureには、論文著者・記事執筆者・読者の価値観が反映されていなければならない。科学の中核をなす価値観である客観性、独立性、自己批判的思考、そして観察、実験、探究へのひたむきな衝動も、良質のジャーナリズムと編集にとって重要な原則だ。サイエンスマガジンと学術ジャーナルの風変わりな混合体であるNatureは、これらの原則に従いつつ、科学に真剣に興味をもつ研究者や多くの人々に対して、その人生や仕事に大きな価値を加えていかなければならない。それなくして、読者の敬意は持続しないと考えている。こうした大望の実現に向け、我々は、今後もまた強固な姿勢を堅持していく。（菊川要 訳） ■